平和学会 関西支部研究会 2019 年 1 月 14 日

東京女子大学大学院
人間科学研究科人間文化専攻歴史文化分野修士 1 年
中山恵

「ドイツにおける第一次世界大戦の追悼と顕彰　―大戦の敗北と神話―」

1-1. 本報告の目的

第一次世界大戦は、2014 年に開戦から 100 周年、2018 年には終戦から 100 周年を迎え、ヴェルサイユ条約までを含めれば 2019 年までの 5 年間、100 周年を記念する様々な行事が各国で行われることになる。帝政から共和制に変わったヴァイマル共和国では、第一次世界大戦の敗戦後、その敗北を受けて第一次世界大戦の戦争の記憶あるいは神話が形成されていき、それらは戦没者記念や戦争責任ともかかわるものでもあった。敗戦後の戦没者記念や戦争責任は、現代の日本でも第二次世界大戦を経て今なおアクチュアルであり、政治や国際関係とも密接にかかわる問題でもある。そこで本報告ではヴァイマル期ドイツにおける第一次世界大戦の戦争記憶や戦没者記念の検討を通じて、戦争の「犠牲」の受け止め方について考えるための一素材を提供することを目指したい。そのうえで、とくに敗戦したドイツにあった心性と、戦没者記念のあり方がどのようにかかわっていたのかについて考察する。

1-2. 戦没者記念の研究への視角

平和構築と歴史学

近年の第一次世界大戦研究を牽引してきたイギリスの歴史家ジェイ・ウィンター Jay Winter は、大戦を思い起こすことは平和を希求するためであらねばならないと考え、戦争を美化することなく、戦争で死んだ人たちに哀悼の念を捧げるにはどうすればいいのかという課題に取り組んでいる（ウィンター、2014）。その際同時に俎上に上る、歴史家はいかにコメモレイションすべきかという問いに対しウィンターは、その方法の一つとしてコメモレイションに平和主義的な枠組みを与え、「戦争に魅力を見出す感情」を抑え込むことを説いている（小関、2014、p90）。

追悼と顕彰

ウィンターの議論では哀悼の重要性を念頭に置いているが、戦没者記念には死者への追悼表現としての慰霊および、ナショナリズムや戦争の美化と結びつき得る顕彰の二つのアプローチがあり、どちらも切り離すことはできないものであると指摘されている（森村、2006 年、p.p.32-36）。同時にそれらは個々の記念碑や式典などにおいて、力点の置かれ方が異なるものであり、また高橋哲也が「犠牲の論理」として指摘するように死者を悼む感情は常に顕彰、ひいては犠牲の正当化につながる危険性をはらむとも言われる。森村によれば、こうした「戦争記憶をめぐる顕彰と追悼の関係を知ることは、このようなカラクリを自覚することであり、また、追悼を目的として掲げるコメモレイションに込められた顕彰のメッセージを敏感に感じ取ることである。そうすることで「戦争の記憶」は戦争を正当化するための道具として利用される道を閉ざし、戦争を回避する自覚的な努力に結びつくのである」（森村、p36）。したがって平和主義的枠組みで考える際には、顕彰と追悼のカテゴリーを二分して考えるのではなく、森村の述べるように顕彰のレトリックや追悼との関係にこそ注意する必要があるだろう。

⇒双方向からの二つの取り組み：
戦没者記念に関する研究には歴史学および平和学双方向からの取り組みに意義があり、また哀悼に重点を置いた記念のあり方を模索の重要性を念頭に置きつつも、顕彰と追悼の関係やそれらのレトリックを認識することが重要だと考えられる。

2. 開戦の熱狂と体験

戦没者記念のあり方の変容

WW1～：第一次世界大戦は、テクノロジーを結集させた機械戦／前線と銃後の協力する総力戦／ふつうの人びとが兵士となる徴兵の 3 つの特徴によって戦死者の数はそれ以前よりも膨大なものになり、これまでの戦争体験と異なるものとしてヨーロッパへ衝撃を与えた（村上、p114）。より膨大な数の人が戦争で亡くなったことで身近な人を亡くした人が多くなり、一般の兵士が慰霊されるようになった。19 世紀以来残っていた（もともとは傭兵や浮浪者、罪人だった）兵士への差別意識も第一次世界大戦を機になくなり、「戦死の民主化」が実現した。こうした総力戦の性格を典型的に表した「無名兵士の墓」がヨーロッパ各国に現れる（村上、p.p.117-118）。

第一次世界大戦の理念と開戦直後

開戦：ドイツ国内の「城内平和」、ロシアに対する「防衛戦争」などがうたわれる→「8 月の体験（8 月の高揚）」「1914 年の精神」として記憶→知識人階級による「1914 年の理念 Ideen von 1914」の展開（三宅、2006、p25）[1]

【内地】各都市で戦争支持や愛国的デモ（松本、2012；木村）　ex.ミュンヘンの広場／ドイツ人の歌

-1914 年、『ドイツ国民に告ぐ』の講演をしたフィヒテの没後 100 年（松本、2012、p89）　⇒ナショナリズムの高揚

【前線】での体験…戦争の恐怖を体験した者に、幻想の入り込む余地はなかった（シヴェルブシュ、p.p.267-269）

-戦場での「火」を通り抜けたフロント（前線）世代にとって、救済の儀式の体験となった。

神話化された戦闘

①タンネンベルクの闘い：1914 年 8 月、ロシア軍をヒンデンブルクとルーデンドルフ率いるドイツ軍が撃退した会戦。

1410 年 7 月 15 日、タンネンベルクでドイツ騎士団 VS ポーランド・リトアニア連合軍との戦闘　→ドイツ騎士団の敗北

→1914 年の 2 回目の会戦で勝利したとして、ヒンデンブルクとルーデンドルフは、ドイツの英雄として圧倒的な人気を得る（松本、2012、p124；柳原）

②ランゲマルクの闘い：1914 年 11 月、「ドイツ人の歌」を歌いながら敵の塹壕線に突撃し、占領したと伝えられる。

「ランゲマルクの青年」がドイツを勝利に導く戦闘として記憶された（松本、2012、p109；モッセ、p77）

→**青年神話とのつながり：**19C～青年期の称揚と老年期の価値低下→WW1～生死双方で青年は最高の地位へ。戦没青年は犠牲と復活、若さの勝利を意味した（モッセ）　ex. 大学に設置された戦没学生記念碑

→タンネンベルクやランゲマルクのように**ドイツ語の地名と結びついた戦場**は、「国民の記憶」にとって重要となる（松本、2012、p124）

第一次世界大戦の記念碑

◇記念碑のモチーフ：①古典主義的シンボル　②キリスト教的シンボル　③青年神話　④戦場や戦闘に関する記憶

（Koselleck；モッセ；松本、2012）

……ドイツの戦争モニュメントはたいていの場合、戦争の現実を隠蔽し、戦争体験の神話を具現化した。それは、図像の細部のみならず、青年と男らしさ、犠牲と戦友関係などの理想を投影した兵士イメージにまで貫徹した（モッセ、p107）

ドイツは、「敗戦を信じていない」にもかかわらず「戦勝」を祝うことができなかった→「名誉の戦死」への崇拝、情熱（松本、2012）

→戦後ドイツにおける戦没者記念の重要性を高めた背景に、「ドイツ軍不敗神話」とのかかわり

◇親しい人の戦死を、銃後の人びとはどう捉えていたか？　――感情史の視点から

名誉、恥、犠牲への歓びという感情：国民への浸透→歓喜して戦争へ参加／名誉の文化による戦争の正当化・プロパガンダ／第一次世界大戦次に山場／ヴァイマル期を生き延びナチ期へ（フレーフェルト）

---

[1] 1914 年の理念：フランス革命「1789 年の理念」に対抗し、戦争プロパガンダを「哲学」的に、経済学者ヨハン・プレンゲ が理論化した。大戦勃発による熱狂的な国民的一体感と戦時経済の組織化を背景として、西欧民主主義的・個人主義の克服を志向した（小野）

3. 第一次世界大戦の敗北と神話

敗戦に関する心理学的・文化的連関についての解明の必要性（シヴェルブシュ）

敗北の神話化

❶「ドイツ軍不敗神話」「戦場では不敗」

・少なくとも 1918 年 9 月ころから、つまり第一次世界大戦の敗北の直前からすでに見受けられる。

開戦当時 12 歳、ドイツの少女エルフリーデの日記：9 月 10 日、母親の発言「負かされることなしにすべてを失う」

・「背後からの一突き伝説」との神話複合の過程

→1918 年 9 月 2 日、ヒンデンブルクによる「ドイツの国民と軍」への呼びかけ：「敵はドイツの武器に対する戦いとならんでドイツの精神に対する戦いを始めたのである」（三宅、2006、p45）

・「戦場では不敗」→「戦わずして降伏」へと読み替え→ヴァイマル共和国が「正当な建国神話」を持たなかった原因（シヴェルブシュ、p235）

❷「戦争責任の欺瞞（虚偽）Kriegsschuldlüge」

・1919 年 6 月 28 日、ヴェルサイユ条約の屈辱とともにドイツの「パブリック・メモリー」となった

・強制講和がドイツの思想状況・精神風土に及ぼした影響→「戦争責任問題 Kriegsschuldfrage」は、大国意識を持つドイツにとっては「矜持と名誉」に関わる重大な問題だった（石田；芝、2000、p17）

・「戦争責任の欺瞞」を糾弾し、ヴェルサイユ体制に反対する運動は「国民運動 Volksbewegung」「国内戦線 Innere Front」「統一戦線 Einheitsfront」として集結[2] [3]。

・1921 年、パリでの賠償会議→支払額の確定・連合国の共同責任の否定→国家国民党によるドイツ帝国の「無罪論」

…第一次世界大戦＝ドイツにとっては「防衛戦争」→したがってドイツ（だけ）に開戦の責任はない

1924 年 7 月、独立社会民主党党員ベルンシュタインの指摘（カウツキー宛の手紙）：⇒「全く責任はない」ことに変えられてしまい、人々は納得してしまう（三宅、2006）

❸「背後からの一突き伝説（匕首伝説）　Dolchstoßlegende」

・第一次世界大戦でのドイツの敗北を、ドイツ軍が戦場で負けたのではなく、銃後の裏切り、とくに社会主義者やユダヤ人による革命によるものとする。実際には、ドイツ全体では第一次大戦を通じてユダヤ系市民 10 万名が前線で戦い、1 万 2000 名が戦死するという相応の犠牲（芝、2000、p24）。

・1916-17 年以降には、すでに「内政面での敵イメージやステレオタイプ」が成立していた（三宅、2006、p44）。

-エルフリーデの日記：左翼を裏切り者、嘘つきとする母親などの発言

-1917 年 7 月 28 日、平和決議は前線兵士の背後を襲うものというトラウプの発言（佐藤、p245）

-前線で戦う兵士に対して「銃後の市民」が感じる後ろめたさのロジック＝内地に対する前線の優位→「背後からの一突き」をもたらしたのは「国内」ではなくて「革命」だったとする見方は、すべての人の罪の意識を晴らすものだった（シヴェルブシュ、p238）

・ヴェルサイユ条約が、広まりつつあったこの伝説が広まる有効な動機になった（アイク、p210）

・1919 年 11 月、国会調査委員会での元陸軍参謀総長ヒンデンブルク元帥の証言を通して、「背後からの一突き伝説」が一般に広まったといわれている（三宅、2006、p26；シヴェルブシュ、p238）[4]。

---

[2] 神話の広まりには、ドイツの外務省や歴史学者、ジャーナリズムの関与があった（ヴィンクラー；三宅、2006）

[3] 「戦争責任の欺瞞」を問題ととらえ、否定する試みも行われていた→5 月、外務省が戦争責任キャンペーンを推進（石田）

[4] 伝説の内容ではなく、この伝説そのものが「背後からの一突き」だったと指摘されるほどの威力をもった（三宅、2006、p24；コルプ、p60）。

☆ヴィンクラー：ヴェルサイユ条約の講和後に広まった二つの歴史伝説として、❷戦争無罪伝説／❸背後からの一突き伝説

→ヴェルサイユ条約修正の必要性の一点については、ドイツでは合意が形成されていた。

☆シヴェルブシュ：❷が登場し、国民の慰めになった　→敗北の汚名を塗り替えるために、❸背後からの一突き伝説

☆三宅：「城内平和」「防衛戦争」→「1914 年の精神」「8 月の体験」／❶→❷→❸（支えて形成）

→「〈神話複合〉となることでいっそう大きな歴史形成力を発揮」（三宅、2006、p24）

戦没者記念と敗北の神話の連関

WW1 後のドイツにおける戦没者記念の重要性を高めた背景として挙げられている「ドイツ軍不敗神話」は、そのほかの敗北に関する神話との関連とともに形成されていったといえる。また、モッセは記念碑のデザインに必要とされたものの一つとして「敗北の克服」を挙げており、これは第一次世界大戦の敗北をドイツ（国、民族）にとって都合よく解釈させ得る 3 つの戦争の神話化にも共通する論理ではないかと考えられる。

すなわち、ドイツ軍の不敗と背後からの一突き伝説は敗北を慰め、その敗北の汚名を塗り替えることに寄与したし、国民的名誉の救済を意図していた（シヴェルブシュ、p.p.233-235）。この慰めと名誉の維持という機能は、フレーフェルトの感情史研究からも論証されているように、「犠牲」の受け止め方ともかかわる点である。またドイツの名誉にかかわる問題とされた戦争責任を、ヴェルサイユ体制への反発とともに否定し乗り越えることも、ドイツの「名誉」を保とうとしていた。言い換えれば、これらの神話は、ドイツの経済的混乱、社会的地位の低下を招いた敗戦を再解釈することで、それらの克服や正当化の機能を持っていた。

したがって戦没者記念は、こうした神話によって守られようとしていたドイツの「名誉」に貢献するかたちで行われ、それを可視化したと考えられる。さらに、これらの敗北の克服に関わる神話形成や、死や犠牲を名誉あるものとして理想化する戦没者記念は、三宅の「神話複合」の考え方を借りれば、いわば両輪となって複合的に第一次世界大戦に関する記憶やイメージを作っていったのではないか。

戦後パラミリタリズムに関する考察

◇「敗北の文化」（シヴェルブシュ）：戦後パラミリタリズム台頭の原因の一つであり、精神状態として分析されてきた（ホーン）

パラミリタリ暴力 paramilitary violence〔準軍事的暴力〕：戦後の暴力形態として顕著な形態。

◇政治の「野蛮化」（モッセ）

モッセによって戦後ドイツの政治状況を説明する言葉として用いられ、平和主義の挫折とも合わせて考察されている[5]。

「野蛮化 brutalization」論：大戦期の軍隊による暴力が、戦後の政治活動を野蛮化したという仮説。

→敗戦した国の場合には、国家が戦後の暴力を再吸収し中立化することは戦勝国よりも難しかった（ホーン）

・❶「ドイツ軍不敗神話」の敗戦をありのままには受け入れない言説や心情は、戦後になっても続いていたという「継続する戦争という気分」の土壌となっていたと考えられる→「継続する戦争という気分」は、戦争の相続人としての極右の自己演出に用いられた（モッセ、p183）

・感情のあり方においては「継続する戦争という気分」を支えたものとして「恥」という感情の役割があったのではないか。同じ戦争による犠牲者でも、戦没兵士の英雄化に対して、捕虜と負傷した敵や、傷痍軍人の戦争による障害を恥ずべきものとする見方（フレーフェルト）は、戦争の悲惨さや敗北の直視を妨げていたと考えられる。モッセの述べる戦争の現実の隠蔽というモニュメントの役割ともリンクするが、これまで見てきた神話のなかで重要とされた「名誉」には、対となる「恥」の価値観があったことに留意したい。

もうひとつのヒロイズムである英雄的帰還も、戦後パラミリタリズムに間接的につながると思われる。すなわち、戦前の行動規範を超えた暴力行為を行った人間たちにとって、その行動を正当なものとして認められる社会や国家において、それはトラウマにはならず、彼らが戦後の文民生活に復帰していたことが明らかにされている（ホーン）。

---

[5] ヴァイマル共和国期には、平和に関する議論や、平和運動も活発に行われていたという。「背後からの一突き伝説」の裏切り者に平和主義者が迫害されることもあった（竹本）。

4. 第一次世界大戦の追悼と顕彰

戦争墓地と「ドイツ戦争墓地維持国民同盟」

・1919 年、敗戦後の資金難の背景に、また廃止された軍隊の代わりとして、ドイツでは「ドイツ戦争墓地維持国民同盟 Volksbund Deutsche Kriegsgräberfürsorge」(VDK)、オーストリアでは「オーストリア黒十字　Österreiches Schwarzes Kreuz」（ÖSK／黒十字）という民間団体が結成されていた（松本、2012、p102；モッセ、p89）

・外国における戦争墓の設立と維持が主な目的（松本、2006）

・1922 年 12 月 29 日、戦争墓法の制定（松本、2012、p109）

・1926 年、ドイツとフランスの協定締結→フランスでの墓地建設（松本、2012、p109）

　イギリス、イタリア、ベルギーとも同様の協定。(現在、VKD は 100 か国以上で戦争墓管理をしている)

・「国民追悼の日」(復活祭前第 5 日曜日／大斎節（四旬節）第 2 日曜日）に、ドイツでは第一次世界大戦の追悼記念日として行事が行われるように　⇔連合国の戦没者追悼記念日 11 月 11 日

←VDK による定着への働きかけ＝ヴェルサイユ体制打破の意図を掲げて運動（松本、2006；2012、p114)。

　VDK の立場は、戦争神話の❷戦争責任の欺瞞や❸背後からの一突き伝説にどの程度つながり得るものだったのか、検討の必要

「戦闘神話 Schlachtenmythen」の記念と追悼の記念碑

★1925 年、エーベルト大統領の死去→国民による大統領直接選挙→右翼が擁立する陸軍元帥ヒンデンブルクが大統領に当選：生前からすでに「タンネンベルクの勝者」として神話化／政治的無関心層による君主制復活への郷愁に満ちた過去の美化（ヴィンクラー）

◇1927 年の二つの記念碑

・タンネンベルク記念碑の除幕式@タンネンベルク、かつてのドイツ騎士団の拠点（松本、p124）

　-ヒンデンブルクが列席して除幕式→「国民記念碑」とされる。

・3 月、漂う天使（栄誉の碑）Der Schwebende@ギュストロウ、エルンスト・バルラッハ Ernst Barlach 制作

←1926 年にギュストロウ大聖堂開基 700 年と重ねて、第一次世界大戦戦没兵士栄誉の碑の依頼

　-ドイツ表現主義の代表的彫刻。反英雄的な死と苦悩が表現される（モッセ、p108）

　　→冒涜的だとして糾弾→戦没者記念の市民宗教的側面（変化を許さない典礼のあり方として）

　-ナチからの批判[6]

　［1941 年、ナチによって像の撤去、破壊→1952 年、第 2 鋳造@ケルン、アントニター教会；1953 年、ギュストロウ大聖堂へ第 3 鋳造が送られ、「警告の碑」として受容］

◇彫刻家バルラッハの記念碑

・1928 年、戦う天使@キール大学内精霊教会、バルラッハ制作［1937 年撤去→WW2 後、聖ニコライ教会前に再建］

嘆きの母（栄誉の碑）@聖ニコライ教会［1944 年爆撃で破壊］(松本、2012、p163)

・1929 年、栄誉の碑 Das Magdeburger Ehrenmal@マクデブルク大聖堂、バルラッハ制作　［1934 年撤去→48 年再建］(松本、2012、p165)

　-ナチからの批判：アルフレート・ローゼンベルク[7]「ソヴィエト兵のヘルメットを被った、小さな、半ば白痴を思わせる、人種もはっきりしない内向的な混血の変種が、応召した兵士たちを象徴しているとは！　私は信じている。健全なる突撃隊員は誰でもが、自覚した芸術家同様、この件に関して同じ判断を下すであろう」→人種主義的、反マルクス主義的な批判（松本、2012、p165）

---

[6] 「東方人種的（ostisch)、もしくはその他の劣等人種、下等人種的なものと共通する方向を持っている」として、ナショナリスティックであり、東欧への差別意識を含んだ批判（松本、1999、p.p.101-102)。

[7] 党機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』の編集責任者にもなった初期のナチ党幹部

→バルラッハの彫刻は、兵士の勇気、名誉の戦死を讃えるよりは、兵士の苦悩を表現し、戦争そのものを告発するものになっていた。「戦意高揚」の役には立ちそうにもないそれらの記念碑は、ナチが政権をとると「反戦的」、「退廃芸術」として撤去されたり、破壊されたりした（松本、2006、p58）。

⇒形式的には「栄誉の碑」として分類こそされるものの、ナチがなぜ批判したのかを分析すれば、バルラッハの記念碑が持つ意味は顕彰だけではなく、追悼の意味が強く込められていたと考えられる。

★1930 年、20 年代の相対的安定期の終焉→議会制民主主義から大統領体制への転換（ヴィンクラー）

◇1932 年の墓地と記念碑

・7 月 10 日、ランゲマルク・ドイツ兵士墓地の除幕式@ベルギー、ランゲマルク：1 万 143 人の埋葬、6313 人の身元が判明（松本、2012、p110）[8]

・1932 年 7 月 23 日、版画家・彫刻家ケーテ・コルヴィッツ Käthe Kollwitz の息子ペーターが葬られていたロッヘフェルテ Rochefort 墓地@ベルギーに、コルヴィッツの彫刻「追悼する両親　Trauerndes Elternpaar」が設置される。バルラッハのアドバイスを受けて完成（モッセ、p111；松本、2012、p158）

←1914 年 10 月 22 日、コルヴィッツの次男ペーターの死

12 月 1 日付けのケーテの日記：「若い志願兵の犠牲的な死に対するもの」として「ペーターの記念碑」計画

→コルヴィッツの「追悼する両親」は見るものへの「追悼」の意味合いが強く作られているものの、当初には犠牲的な死のもたらす名誉＝慰めとして計画されていた（フレーフェルト）。フレーフェルトの心境の変化と、顕彰と追悼の関係に注意したい。

［その後、「追悼する両親」は墓地の統合とともにヴラッズロ Vladslo ドイツ兵士墓地へ移される。ピーターに関連して、1938 年にはキリスト教美術のピエタとして「死んだ息子を抱く母」という像も作られた。］

5. 総括と展望

・第一次世界大戦での敗北の克服に関わる神話形成、死や犠牲を名誉あるものとして理想化する戦没者記念によって精神的および視覚的な側面から戦争記憶やイメージが形成されていったのではないか。

・感情史の視点から見ると、犠牲をただ悲しむだけでなく、「喜び」として正当化する感情が、何を「名誉」や「恥」とするかという価値観とともに広く浸透していたと考えられる。そこには、追悼だけではなく顕彰によって敗北の汚名をぬぐう正当化のレトリックが求められていた。

・バルラッハやコルヴィッツは表現主義の芸術家であったことに注意したい。芸術家の手による作品と、一般的にされる戦没者の記念の受け入れられ方や広まり方の違いについても今後検討したい。また、追悼に重きを置く記念碑への批判を分析することで、顕彰に込められた意味合いや、何が戦没者記念に重要だと考えられていたのか検討できるのではないか。

・VDK は、国家ではなく民間による戦没者記念にかかわる団体として、また現代でも存続して人道主義的活動を使命としている団体としても、その歴史的分析は重要である。VDK の動向やその意図、影響の考察のために以下の二つの文献および史料の検討を今後の課題としたい。

-Jakob Böttcher, *Zwischen staatlichem Auftrag und gesellschaftlicher Trägerschaft : Eine Geschichte der Kriegsgräberfürsorge in Deutschland im 20. Jahrhundert*, 2018, Vandenhoeck & Ruprecht GmbH & Co. KG, Göttingen（ドイツ戦没者記念の研究者 Manfred Hettling に学び、2018 年 9 月に出版された Jakob Böttcher の博士論文）

-*Kriegsgräberfürsorge*（VDK の機関紙）

---

[8] 1919-1920 年、ベルギーの戦争墓維持組織が戦没兵士を集める。1920 年代、ドイツ人の公的な関与が始まる。1930 年、VDK が仕事を引継ぎ、墓地を完成させた。